

大友家臣・朝倉一玄の人物像と戦歴

出自・仕官と人物像

朝倉一玄（あさくら いちげん、生没年不詳）は、戦国時代の豊後国の戦国大名・大友氏に仕えた家臣です^①。その出自や生涯についての詳細は伝わっておらず、生年や没年も不明で、史料上実在した人物なのか創作上の人物なのか確定していません^①。江戸時代初期に大友氏の興亡を描いた軍記物語『大友興廃記』に名前が見える武将で、同書によれば大友家重臣・志賀親次の配下として豊後国岡城（現在の大分県竹田市）を守る一員でした^②^③。特に志賀親次が築いたとされる岡城西方の支城・駄原城（だはらじょう/だばるじょう）の城代（守将）を務めたとされています^①^④。なお「駄原城」という城は定説となる所在地が明確でなく、大分市中心部にも「だのはる（駄原）」と呼ばれる地名がありますが、岡城から遠く離れており別地点と考えられます^⑤。むしろ志賀親次が島津軍の侵攻に備えて急造した物見やぐら程度の砦だったとの見方があり、岡城の約8km西方、直入郡柏原郷戸上村付近（現在の竹田市戸上地区）に存在したとの説があります^⑥^⑦。現地の伝承では七ツ森古墳群南東の丘陵上に位置する「下駄原」「杉山」という地名付近にその痕跡らしき地形が残るとも伝えられています^⑦。以上のように確かな経歴こそ不明瞭なものの、朝倉一玄は志賀親次の麾下で岡城周辺防衛を担った一武将として伝わっています。

駄原城攻防と奇計「留守の火縄」

天正14年（1586年）冬、九州征服を狙う薩摩国の島津氏が豊後国に侵攻し、豊薩合戦（ほうさつがっせん）と呼ばれる戦役が勃発しました。島津軍は大友氏の要衝である岡城を大軍で包囲しましたが、志賀親次は孤立無援の中で積極的に抵抗を試みます。志賀親次は肥後国から豊後へ至る12の侵入路にそれぞれ配下の武将を配置し、駄原城・笹原目城・鬼ヶ城（いずれも現大分県竹田市周辺）など支城との連携を図りつつ、奇計やゲリラ戦法で島津軍を攪乱し援軍到着まで持ちこたえようとしていました^⑧。こうした状況下で天正14年

（1586年）12月頃、島津方の将・坂瀬豊前守（逆瀬豊前守とも）率いる軍勢が朝倉一玄の守る駄原城に攻め寄せてきました^⑨^⑩。このとき朝倉一玄は、正面から籠城しては不利と判断し、敢えて奇策をもって敵を陥れる計略を立てます^⑨。彼は城内の建物や堀などの防御施設をことごとく破壊・切断させ、真夜中にその残骸へ火を放って城内を炎上させました^③。さらに「留守の火縄（るすのひなわ）」と称されるからくり——人のいない城で火縄により時限的に発火させる仕掛け——を駄原城に残して、自軍は密かに城を脱出し近隣の菅ノ迫（すがのさこ）砦へ退いたといいます^⑪^⑫。突然燃え上がった無人の駄原城は、まさに「空城の計」を思わせる奇計でした。

この時の様子について『大友興廃記』には次のように描かれています。駄原城から大火の手が上がるのを見た坂瀬豊前守は、「是は定めて手過（てあやま）ち（失火）にてぞ有らん。此騒ぎにいざ乗取らん」（これはきっと城内の手違いによる失火であろう。この混乱に乗じて攻め取ってしまえ）と喜び勇んで城内へなだれ込み、難なく駄原城を占拠しました^⑬。しかしそれこそが朝倉一玄の狙いでした。島津軍が攻め入った時、場内には人影はなく、激しく燃え盛る炎だけが島津勢を嘲笑うかのように照らし出していたとも伝えられます^⑭。敵将坂瀬は「思いがけない出火で城を手に入れられたのだから手柄には違いない」と火を消し止め占領しようとしていましたが^⑭、実際には城中の建物はすべて焼け落ち、防御の盾となるものは何一つ残されていませんでした^⑮^⑯。この奇計は無人の城をわざと焼いて敵を誘引し、戦わずして城を明け渡すように見せかける「欺瞞作戦」だったのです。後にこの戦法はその仕掛けから「留守の火縄」と呼ばれるようになり^⑫、具体的にどのような装置や方法で発火させたのかは史料に詳しく残されていません（城が突然燃え上がるように見せたと伝わるのみ）^⑰。このため「まるで時限式の地雷のようだ」「三国志で孔明が使った火薬地雷を連想させる」などと後世の創作や俗説で語られることもあります^⑱。実際のところは脱出直前に放火し、内部からの失火に見せかけたものと推測されますが、奇抜な発想であることに変わりはなく、戦国屈指の奇計として知られています^⑲^⑳。

豊薩合戦での戦歴と志賀親次との協力

朝倉一玄が仕掛けた「留守の火縄」は見事に功を奏し、駄原城を陥れた島津軍は油断しきった状態に陥りました。その間に朝倉一玄は急ぎ**岡城の志賀親次に援軍を要請**します²¹。報を受けた岡城主・志賀親次は、自らの実兄で副将格の志賀掃部助（しが かもんのすけ）を筆頭に、大森弾正、後藤遠江守ら手勢約1500人を救援に差し向けてました²¹。一方、菅迫城に退いていた朝倉一玄も自軍を再結集し、志賀からの援軍と合流すると、城を奪われたふりをしていた**駄原城へ反撃**に転じました²²²³。既に駄原城は炎上して建物という建物は灰燼に帰し、城内外の柵や土塁も朝倉一玄の手で事前に徹底的に破壊されていたため²⁴、城内に立てこもる島津勢は丸裸同然で防戦の術を失いました²²。そこへ三方向から押し寄せた朝倉・志賀連合軍の猛攻により、島津軍は逃げ場を断たれて大混乱に陥ります²⁴。逆襲に転じた朝倉一玄自身も先陣に立って勇猛に戦い、侵入していた敵兵を次々と討ち取りました²¹。ついに**坂瀬豊前守は配下の騎馬武者8騎ほどと辛くも駄原城から落ち延びますが**、城から逃走する途中で深い田圃にはまり動きが鈍ったところを志賀勢の猛将・後藤大学（＝後藤遠江守）および後藤市助に追いつかれ、討ち取られてしまいました²³。こうして**島津軍は大敗を喫し、いったん明け渡した駄原城も朝倉一玄らの手によって奪還されました**²⁵。また同じ頃、岡城西方12kmに位置する笹原目城でも、城代・阿南惟秀の謀略によって島津軍の将・白坂石見守が討ち取られるなど、志賀親次の部下たちは各地で工夫を凝らした奇策で敵軍を翻弄しています²⁶²⁷。朝倉一玄の活躍はその代表例として、孤立無援の岡城を守り抜いた志賀親次の武名を高める結果となりました。

この一連の攻防戦は、豊臣秀吉の本隊が九州に到着する直前の攻防戦として重要な意味を持ちます。志賀親次とその家臣団（朝倉・阿南ら）は決死の防衛戦を展開し、結果的に**島津義弘率いる島津軍主力を豊後国に釘付けにして撃退**し、秀吉軍の援軍到来まで持ち堪えることに成功しました⁸¹⁹。島津氏の猛将・義弘の陣営を度重なる奇襲で攪乱したこれらの戦法は後世に語り草となり、特に朝倉一玄による「留守の火縄」での大勝利は、島津家久・義弘父子が率いたとされる九州最強とも称された軍団に一矢報いた名策として称賛されています¹⁰¹⁹。

軍記物・地域史における描写

朝倉一玄の事績は、主に江戸時代初期に成立した軍記物『大友興廃記』に詳しく記録されています。『大友興廃記』は寛永12年（1635年）頃に旧大友家臣・杉谷宗重によって著された全23巻からなる軍記物語で、大友宗麟（義鎮）からその嫡子・大友義統に至る大友氏二代の栄枯盛衰を活写した作品です²⁸。同書は史実の年月に誤りも多いものの、九州における大友氏関連の逸話を豊富に盛り込み、後世の史書や物語にも大きな影響を与えました²⁹。朝倉一玄のエピソードもこの『大友興廃記』の中で語られており、先述の通り駄原城攻防戦での奇略「留守の火縄」の顛末が描かれています³⁰¹³。実際に歴史書として編纂された地誌にもこの話は取り入れられており、江戸後期編纂の豊後岡藩史料『豊後国志』（享和3年〈1803年〉成立）にも「朝倉一玄が駄原の砦に自ら火を放って退去し、敵をおびき寄せて菅迫の砦で反撃し、岡城を堅守した」と記されています³¹。これは『大友興廃記』とほぼ同じ内容であり、地域の伝承・記録として朝倉一玄の奮戦が語り継がれたことがうかがえます。さらに「**上井覚兼日記**」など島津方の史料にも関連する記述があり、例えば同日記の天正14年2月16日条には「志賀道益（＝志賀親次の兄）が菅迫という所に籠もっている様子」について触れられており³²、菅迫砦が実在したことや志賀一族が関与していたことが窺えます。島津側の軍記『豊薩軍記』等にも志賀親次らの奮戦が描かれ、忍びを使って敵陣営に放火したことなど攪乱戦法の数々が記録されています³³。以上のように、朝倉一玄と「留守の火縄」の逸話は、大友方・島津方双方の伝承や地域史料に散見され、軍記物語や地誌の中で語り継がれてきました。

一方で、一次史料に直接朝倉一玄の名が登場する例は限られていますが、皆無ではありません。平凡社『日本歴史地名大系』によれば、「大友家文書録」天正14年12月条に「**島津義弘隊ノ将・坂瀬豊前守、駄原畑の壘を攻む。志賀親次の子城にして朝倉一玄これを守る**」といった趣旨の記録が残されているといえます³⁴。これは大友氏側の公的記録（書状や報告書）に朝倉一玄の名と駄原の戦いが記録されたことを意味し、物語だけでなく史実としてもこの戦闘と人物が認知されていた可能性を示す貴重な手掛かりです³⁴。また島津側の記録でも、坂瀬豊前守の戦死について「**天正十四年、菅迫城を攻めた際、志賀勢との合戦で坂瀬は後藤遠江守（後藤大学）に討たれた**」との記述が見られ¹⁰、奇策「留守の火縄」の詳細には触れられないもの

の、菅迫・駄原付近で坂瀬隊が大友（志賀）勢に敗れた事実自体は伝えられています。このように複数の側面から史料を照合すると、朝倉一玄という人物と駄原城の戦いそのものは何らかの歴史的事実に基づいていると考えられます。ただし後述のように、その活躍ぶりについては軍記物語的な脚色や誇張が加わっている可能性も指摘されています。

史実性と創作・伝承の考察

朝倉一玄に関するエピソードは、大部分が江戸時代の軍記物によって伝えられているため、その史実性については慎重な検討が必要です。『大友興廃記』は大友家家臣の手による物語であり、大友氏を讃える意図や誇張が含まれていると考えられます²。実際、同書では志賀親次の奮戦にスポットが当てられており、朝倉一玄という人物も志賀家の武功を彩る架空の英雄として創作された可能性は否定できません²。生没年はおろか系譜など出自に関する記録も残されていない点から、後世のフィクションではないかという見解もあります¹。また「留守の火縄」という離れ業についても、当時の技術水準でどの程度の時限装置が実現可能だったか不明なため、一種の寓話的表現だった可能性もあります。現存する史料には具体的な仕掛けの描写がないため¹⁷、「城に火を放って敵を誘い込んだ」という事実を、物語上で脚色して**奇術的な名称**を与えたのではないかと考えられます。いわば中国故事の「空城の計」や「埋火の計」のように、実際の戦術をドラマチックに誇張したものでしょう。

しかし一方で、前述のように**大友家の公的記録や地元史料にも朝倉一玄の名が見える**ことから、全くの虚構というわけでもなさそうです³⁴。坂瀬豊前守の討死という結果も島津方の記録に一致するため、駄原城付近で島津軍が敗北した戦闘自体は歴史的事実と考えてよいでしょう¹⁰。軍記物語で詳細に描かれた朝倉一玄の奇策は、その戦闘を脚色した伝承であり、本人も実在の無名武将だった可能性があります。こうしたケースは戦国時代の合戦記には珍しくなく、例えば川中島合戦の「啄木鳥戦法」（武田側の奇計）や賤ヶ岳合戦の「余吾川の退き浅瀬」（羽柴側の虚報作戦）など、史実の戦法に後世の軍記が名前を付けた例も多々見られます。同様に「留守の火縄」も後世に付けられた名称である可能性が高く、その実態は単に計画的な放火退却戦術であったとも推測できます¹²。以上の点から、**朝倉一玄は実在したが、その活躍は軍記物語で脚色された人物像と総括でき、史実と創作が融合した「半ば伝説的人物」と位置づけられています。**

創作・ゲーム等での登場例

無名に近い武将ながら、その奇抜な戦法ゆえに朝倉一玄は近年になって再評価され、歴史ファンの間で注目される存在となっています¹⁹。例えば歴史研究家・鈴木真哉氏の著書『戦国時代の計略大全』（PHP研究所、2011年）では、「戦国武将たちの奇計・奇略」として朝倉一玄の「留守の火縄」が紹介されており、山本勘助の「啄木鳥の計」、真田幸村の「埋火の計」、酒井忠次の「空城の計」など名高い策略と並列して挙げられています²⁰。また、**コーエーの歴史シミュレーションゲーム『信長の野望・創造 戦国立志伝』**（2016年）では、ダウンロードコンテンツによって「朝倉一玄」が登場人物に追加されました^{19 35}。ゲーム内では彼は「大友家の軍師」と位置づけられ、豊後侵攻で奇計を発揮して島津軍に大打撃を与えた武将として設定されています³⁵。同時に追加された「山内千代（見性院）」とともに新武将として登場し、プレイヤーがシナリオに登場させることが可能です³⁵。このようにゲーム等のフィクション作品では、その伝説的なエピソードが評価されキャラクター化されるなど、マイナー武将ながら異例の脚光を浴びています。SNS上でも「大友家の爆破師・朝倉一玄の出番！」といった言及が見られるように³⁶、彼の奇策は**爆破戦法の先駆け**としてユニークな存在感を放っています。現代の小説やドラマで取り上げられた例は多くありませんが、逆にこの未知の英雄性が創作の余地を残しているとも言えます。地元大分県の郷土史でも語り草となっている朝倉一玄の奮闘は、史実と伝説の狭間にありながら、戦国口マン的一幕として今なお人々の興味を引きつけています。

1 2 5 6 15 18 22 30 地雷使い？ 朝倉 一玄 | ひでさん

<https://note.com/hido/n/n21fa8c5f3e06>

3 4 8 13 16 23 27 33 志賀親次～島津の大軍を孤塁で撃退！知られざる豊後の名将 | WEB歴史街道 | 人間を知り、時代を知る
<https://rekishikaido.php.co.jp/detail/5843?p=1>

7 9 10 11 12 14 19 21 24 25 山城特集 「駄原城（岡城の支城）」 動画と豊薩合戦Episode | 岡城跡（岡城趾）！天空の城 岡城の石垣・桜・紅葉 岡城.com公式サイト 日本最強の城！九州・大分
<https://okajou.com/archives/2582/>

17 豊薩合戦 - Wikipedia
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B1%8A%E8%96%A9%E5%90%88%E6%88%A6>

20 戦国時代の計略大全 | 鈴木真哉著 | 書籍 | PHP研究所
<https://www.php.co.jp/books/detail.php?isbn=978-4-569-79854-7>

26 「大友宗麟の群像」 豊薩合戦。 川村一彦 | 歴史の回想・川村一彦
<https://ameblo.jp/hikosannrekisitanbou/entry-12830133568.html>

28 29 大友興廃記 - Wikipedia
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E5%8F%8B%E8%88%88%E5%BB%83%E8%A8%98>

31 32 解説ページ
<https://jlogos.com/docomosp/word.html?id=7231212>

34 駄原城跡(だのはるじょうあと)とは？ 意味や使い方 - コトバンク
<https://kotobank.jp/word/%E9%A7%84%E5%8E%9F%E5%9F%8E%E8%B7%A1-3104737>

35 「山内千代」「朝倉一玄」 武将データ Trophy Guides and PSN Price History
<https://platprices.com/game/58707-%E5%B1%B1%E5%86%85%E5%8D%83%E4%BB%A3%E6%9C%9D%E5%80%89%E4%B8%80%E7%8E%84%E6%AD%A6%E5%B0%86%E3%83%87>

36 じょうん on X: "@kinghalo_M ここは大友家の爆破師 朝倉一玄の ...
<https://twitter.com/johun56/status/1929482188799803825>